



高校生のための心理学講座 in 琉球大学

琉球大学法文学部人間科学科 教授
遠藤光男 (えんどう みつお)

高校生のための心理学講座は、2012年度から開講され、初年度は全国8カ所、2013年度は12カ所で開催されました。今年度は全国14カ所で行われる予定です。琉球大学でも九州・沖縄Ⅲ地区として2013年度に引き続き、今年度も行われます。今回は、2013年度の講座の様子を報告させていただきます。

本講座は、2013年8月17日に琉球大学法文学部において開催されました。参加者は高校生54名、高校教員3名、その他一般の方10名の合計67名でした。講師は、筆者を含めた沖縄県内の5名の心理学教員でした。講演時間は一人50分で、最後の5分間は質問の時間としました。それぞれの内容を講演順に簡単に説明します。

発達心理学 (琉球大学法文学部・財部盛久)

前半では、発達心理学は人間の誕生(受精)から死に至るまでの心身の変化についてデータの収集と処理にもとづく推論により実証的な研究を行う学問であることや、理論的研究と応用的研究があることなどの説明と共に、発達心理学研究の魅力についても紹介しました。後半は、発達研究の具体例として、母親の3～5歳の子どもに対する語りかけの仕方に東京と沖縄でどのような差があるか検討した柿沼・上村(2003)の研究が紹介されました。そこでは絵本の一場面のような絵を通してどのような語りかけがなされるか検討されていましたが、東京と沖縄の母親の語りかけの違いやその後の研究の展望などの解説がされました。

臨床心理学 (琉球大学教育学部・伊藤義徳)

最初に臨床心理学の専門家である臨床心理士

の活躍の場として、教育や医療、福祉・矯正領域などがあることや、教育現場で活躍するスクールカウンセラーの仕事内容などの具体的な説明がされた後に、臨床心理学とは心の問題が生じる法則を見いだすことと、それをもとにして心の問題を解決・予防する方法(心理療法)を研究する学問であるとの説明がされました。そして、代表的な心理療法の一つとして認知療法が紹介され、その基盤となるABC理論(Activating event, Belief, Consequence)と、認知療法の過程でクライアントに起こるのはBの信念の変化であること、その変化を起こすために必要なものは何かなどについての説明がありました。

認知心理学 (琉球大学法文学部・遠藤光男)

本講演では、筆者の専門領域である顔認識過程の研究を通して、認知心理学の研究の特徴やおもしろさを伝えることを試みました。最初に顔に関する興味深い現象としてサッチャーの錯視や合成顔効果、凹面顔の錯視、目の位置の錯視などを紹介しました。その上で、認知心理学についての概要を説明し、最初に紹介した錯視などの謎解きを認知心理学や顔認識研究と関連させながら説明しました。最後に顔認識研究の中心的問題の一つでありながらもまだ解決のついていない顔の特殊性についての議論を紹介しました。

対人心理学

(沖縄国際大学総合文化学部・泊真児)

本講演は、対人心理学は社会心理学の一部で対人関係を研究する分野であること、社会心理学は二人以上の人がいる(または、いると想定



Profile—遠藤光男

東北大学大学院文学研究科博士課程後期修了。光星学院八戸短期大学教授を経て、現職。博士（文学）。専門は認知心理学。著書は『顔と心：顔の心理学入門』（分担執筆、サイエンス社）、『発達の基盤：身体、認知、情動（発達科学ハンドブック4）』（分担執筆、新曜社）など。

される）状況での心の動きや行動を研究する学問であることを説明した上で、「高校入学の最初の頃に初めて友達になった人はどんな人か」、「その中に、たまたま出席番号が近かった人はいるか」、「その友達と今も友達関係が続いている（または、いない）のはどうしてか」、等について受講者に問う形で始まりました。そして、われわれがどんな人に魅力を感じ友人関係を築いていくのかについて、心理学ではどんな方法で研究してきたか、どんな要因が発見されてきたかを、主に対人魅力の近接性と類似性の要因についての実験的研究結果を紹介しながら解説がなされました。

社会心理学（集団心理学）

（琉球大学法文学部・加藤潤三）

本講演では、社会心理学とは何か、集団とは何かを説明した上で、まず集団を形成するメリットを進化論的観点と心理学的観点から解説しました。そして、集団の中でどの個人の力が重要になるかは、課題の性質によって変化することや、他者の存在によって個人の課題遂行が増加したり減少したりすることがあることが解説されました。続いて、集団の中では他者の意見に同調してしまうことがあることが、アッシュの実験の動画や、自動運動に基づいた研究を紹介しながら説明されました。さらに同調によって集団極性化のように集団の意見がより極端な方向に偏る危険性もあることなどが紹介されました。

受講者からの質問・アンケート結果

各講演の最後に設けた質問の時間には、「どんなときに心理療法のやりがい（または、つらさ）を感じるのか」など、それぞれに興味深い

質問がなされました。特に印象に残ったのは、紹介した研究方法への質問でした。たとえば、発達心理学で紹介した研究には、「沖縄の比較として東京を選んだのはどうしてか」、「沖縄と東京で母子を入れ替えるとどうなるのか」などの鋭い質問がありました。また、対人心理学や集団心理学では、「実験参加者はどうやって集めるのか」などの質問や、「心理学研究では得られたデータを統計的に処理し、一般的な傾向を探るのが大きな目的だと聞いたが、例外を見つけるその研究をすることもあるのか」などの質問もありました。これらの質問があがってきたことには、すべての講演において「心理学が科学的な方法で人間を研究している」ことを強調していたことが関係していると思われませんが、同時に高校生たちの科学的な研究への潜在的な力も感じさせてくれました。

講座終了後に行ったアンケートにおいても心理学の研究が多方面にわたっていることが理解できてよかったという感想が多数寄せられ、本講座の目的である「心理学への誤解を解くこと」や「心理学が科学的根拠に基づく学問であることを理解してもらうこと」などがある程度達成できていたことがうかがえました。また、すべての講演がそれぞれ何名かの受講生に特に印象に残った講演としてあげられており、受講生の関心が一つの領域に偏らず、それぞれに心理学の様々な領域に関心をもってもらえることも確認できました。

文献

柿沼美紀・上村佳世子（2003）母親の語りに見られる地域差（2）：東京と沖縄の発話構成、共同作業としての語りの比較。『発達研究』17, p.87-96.